

## ビッグー・トーマス (III)

— リチャード・ライトと人種関係 —

安 部 大 成

まえがき

- 1 ビッグー・トーマスの特徴とその構築過程
- 2 ビッグー・トーマス
  - a. メアリー・ドルトンの死まで …… (途中まで第 26 巻第 1 号)  
(a 続き) …… (第 27 巻第 1 号)
  - a'. リチャード・ライトの影
  - b. 捜査関係者との対決 …… (以上本号)

### 2 ビッグー・トーマス [承前]

#### a'. リチャード・ライトの影

ビッグー・トーマスが弁護士マックスに語った、メアリー・ドルトンに対する憎悪と恐怖は事実に反することを見てきたが、これは作品構成上の矛盾、あるいは、ビッグーの虚言と解釈するよりも、白・黒両人種の異性に対するライト自身の情愛の矛盾と葛藤とを反映するもの、と見る方が納得し易いと考えられる。

ビッグーとメアリーとの関係を a において見てきたが、彼女に対する憎悪と恐怖は見られなかった。

寝室において、メアリーを誤って窒息死させる場面でも、そこには、彼女に対する人種的憎悪も恐怖も見られない。

これをまとめておこう。

夫人が入室するまでの行為を、メアリーに対する一方的愛撫とすれば、夫人の入室後の行為はメアリーに対する彼の意志、または欲求の強制と見ることが出来る。彼は愛撫に対する彼女の反応をうかがうかのように、彼の強い欲求に対するメアリーの抵抗を感じながら、積極的に対応し、これを封じて彼の意志に従わせる。これは彼の行動に読み取れる<sup>1)</sup>。

枕で口を押さえられた彼女は力尽き、彼は手を放すことになるが、この行為はあたかもメアリーが彼の強い欲求を受け入れて、相互の関係が満たされ、事が完了したかのようである。

「枕から両手を放すと、長いゆっくりとした吐息がベッドから暗い部屋の空気のなかにもれ上がるのを耳にした、……」<sup>2)</sup>

夫人が立ち去ると、彼はメアリーに近付くのだが、その時の彼の心境は緊密な関係を持っていた、愛しい人に対する思いに似ている。

「彼は薄暗いベッドに目を向け、長い間逢わなかった誰かのことのように、メアリーのことを思い出した。彼女はやはりそこにいた。怪我をさせてしまっただろうか？」<sup>3)</sup>

ここには、人種意識に伴う否定的な感情は全く見られない。彼は彼女を一人間として認識し、さらに、親愛なる女性として、深い思いやりの情をもって受け止めている。

本稿(II)において、ビッグーが彼女を車に乗せて大学へ送る途中、彼女が

「彼も人間であるかのように、彼も彼女と同じ世界に住んでいるかのように、対応」してくれることに、強い印象をうける点に言及し、ビッグーが「知り合って間もない彼女に、人種関係と社会関係を越えた人間関係を感じた意味は大きい。」と指摘したが<sup>4)</sup>、ビッグーは今や、メアリーが彼に対して行なった以上の、親密な情感をもって彼女に対応している。

彼にはベッシーという名のガールフレンドがいる。彼は自分に与えられた、ドルトン邸宅内の一室が気に入り、喜びを感じた時、ベッシーをこの部屋に連れて来ようと即座に思う。この黒人女性ベッシーは、彼には、喜びを、また恐らく悲しみも、共有したい女性である。彼女との付き合いは、当然のことメアリーよりもはるかに長く、実質がある。ところが、ドルトン邸宅に彼女を支えて入り込んでからの、わずかな時間に、彼はメアリーの魅力に強く引かれ、ベッシー以上に好意を抱くことになる。

ビッグーはメアリーを過失によって死亡させるが、ベッシーの方は殺害する。言い換えると、白人女性メアリーに対しては、殺意はなかったが、黒人女性ベッシーに対しては、殺意があったということになる。殺意は強力な否定の意志である。白人女性に対して否定的意図はないが、黒人女性に対してはそれがあつたことを意味する。

これは、ビッグー・トーマスは、ベッシーよりもメアリーが好きであつたが、それを認めなくなつたことを意味する。白人の人種差別を怒り、憎みながら、その白人を好む、あるいは愛することの、自己矛盾に堪え難かつたのだと推測される。

作中人物のこの矛盾は、作家自身の矛盾の反映と考えられる。

『息子』の創作が完成する時期までの、リチャード・ライトの白人女性と黒人女性に対する愛好・嫌悪の情感、思惑、思考に注目し、ビッグー・トーマスの矛盾と葛藤との関連性を考えてみたい。

彼は『人種隔離実践の倫理：自伝のスケッチ』(1937. 以下『倫理』)におい

て、青年期に達するまで暮らした南部社会で、白人優位の生活様式に、内心強く反発しながらも、生命を守るために、これに自己を適応させようと、屈辱の裡に、悪戦苦闘した体験を、幾つかの挿話にまとめている。その一つ。

「ある夜、帰りがけに黒人メイドの一人に出会った。彼女は私の帰る方向に住んでいたから、途中まで一緒に帰ることになった。私達が白人の警備員の側を通り過ぎた時、彼はこのメイドの尻を平手でピシヤリと叩いた。私は驚いて振り返った。この白人はじっと、鋭く、にらみ上げるような目付きで私を見ていた。突然、彼はピストルを引き抜いて言った。

『おい黒いの！ 気に入らんのか？』

私はまごまごしていた。

『気に入らんのかと尋ねとるんだ。』彼は一步踏み出して言った。

『そんなことはございませぬ。』

『それなら、そのように言え！』

『はい、それでよろしゅうございませとも！』私はできる限り心を込めて言った。

外に出ると、彼女と顔を合わせるのが恥ずかしくて、私はこの女の子の先を歩いて行った。彼女は追いついて来て言った。

『馬鹿な真似はお止し！ あんた、どうしようもなかったのでしょうか。』

この警備員は自衛のために、黒人を二人殺したと自慢していた。……』<sup>5)</sup>

白人男性の軽薄な、礼を失した、性的戯れを制することが出来ないばかりか、その白人男性に屈服し、被害に遭った黒人少女に対して面目を失い、黒人男子として恥じ入る「彼」。黒人の苦境を共有する者として、彼をなだめ励ます黒人少女。

ライトに関して、これと対照的な、性質の異なった体験をした女性がいる。マーガレット・ウォッカーである。

リチャード・ライトは『息子』によって、作家の地位を不動のものにしたが、作品の基になった、ニクソン事件の資料収集には、詩の分野で作家の道を歩んでいた、マーガレット・ウオッカーに協力を求めた。彼女は、これに応じて、献身的にその役を果たした。二人はドルトン邸宅のモデルになる家を見に行ったり、この作品の構想などについて、話し合ったりして、創作面で親密であったが、若い男女としても親しい関係にあり、大方の予想では、二人の関係は、将来を約束したものであった<sup>6)</sup>。

その交流が突然途絶え、苦悶に満ちた日々を送った若き日が、遠い過去の世界に納まった時期に、ライトとの3カ年にわたる、親密な交流の日々を顧みながら、作家及び人間ライトについて述べた、ウオッカーのエッセイ、『リチャード・ライト』(1971. 以下『ライト』)から、ライトの黒人及び白人女性に対する行為の印象的な一場面を取り出してみよう。

「ライトは1937年5月28日、シカゴを去ってニューヨークに向かった。金曜日の午後で、このプロジェクトの給料日であった。私達は普段一緒に、同じところへ行って、小切手を現金に換えていたので、給料の小切手を並んで待っていた時、後ろにいたライトが、小切手を換えに行く時には、待っていてくれるようにと言った。およそ、その頃であった。プロジェクトに勤める、見境のない、若いお喋りの女の子の一人がやって来て、……『マーガレット、ディックにね、帰る時、私達皆に、さようならのキスをしなきゃだめよって、言っという。』と言うのであった。『自分で言いなさいよ、私は言わないわよ。』と私は笑って答えた。小切手を受け取って、振り返って見ると、間違いなく、若い白人の小娘達が、皆、熱烈なお別れのあいさつで、彼をもみくちやにしていた。——そこで、私はその場を離れた。外に出て、一ブロックほど歩いた頃、彼が大声で私を呼びとめるのを耳にした。私は振り向いて、立ち止まり、彼を待った。

『待っていてくれて、言っつつもりだけど?』彼は、にやにやして、

いたずらっぽく、言うのだった。……」<sup>7)</sup>

帰って行くウオッカーを呼び止めて、彼を待つ彼女に対して、自分の行なったことを、拭いとるかのようになり、にやにや笑いして、とぼけた口を開く彼を、彼が描いた、ナイーヴな「彼」と比べて見ると、彼がアメリカの生活面で、個人的に求めていたものが、何であったかを探り出す手掛かりが得られよう。

彼は1927年12月、南部を去って、北部の大都市シカゴへ来た。北部社会の人種関係は、彼が生まれ育った、南部のそれに比べると、極めて開放的なものであった。二十歳になって間もない、彼の欲求や願望は、外的規制と内的抑制の拘束を免れ、率直に、その実現を求めて、自由な活動を見せることになる。

彼がシカゴとニューヨークでの生活を記した、『アメリカの飢え』(以下『飢え』) — これは『恐怖と栄光』という題のもとで執筆し、彼が『黒い飢え』という題で出版されることを望んで1943年に出版社に送った、南部の生活体験と北部のそのの二部からなる原稿の後半部である。前半部は1945年に『ブラック・ボーイ』という題名で出版された。従って、執筆された時期は『ブラック・ボーイ』と同じであり、これに続いて出版される筈のものであったが、ライトの死後17年目、1977年に出版された — には、白人女性に対する彼の観察が、随所に見られる。

シカゴへ来て間もなく、レストランで皿洗いの仕事をした時、彼女達が、黒人と接触する場合、北部の女性と南部のそれとの間には、大きな相違があるのに気づく。二つの出来事を、彼は印象深く描いている。

「ある朝コーヒーを沸かしていると、コーラが、盆に食べ物一杯載せて、やって来て、コーヒーを注ごうとして、私にその体を押し付けた。

『御免なさいね、リチャード』と彼女は言った。

『ああ、いいとも』私はさりげなく答えた。

しかし、私は、彼女が白人であり、しかも、その体が、私の体にびったりと押し付けられていることに気が付いて、はっとした。これは、私の人生において、これまでになかった出来事であり、また、恐ろしい出来事を思い出させるものでもあった。』<sup>8)</sup>

人種隔離制の存在した、当時の南部社会にあつては、人種偏見と社会的慣習によって、黒人男性と接触するような機会を持つことは、南部の白人女性には受入れ難いものであつた、と言われる。

ライトは、これが南部であつたら、と次のように想像せざるを得なかつた。

「……もし南部の白人の女の子が、一杯のコーヒーを注ぎたければ、彼女は私とその体が触れないように、私に、脇によけるようにと、命令したであらう……」<sup>9)</sup>

それだけではない。白人女性の体に触れる、あるいは、それを意図したと疑われた場合、黒人男性に、どのような制裁が加えられるか、その恐ろしい出来事については、ライトは聞き知っていた。

もう一つの出来事。

「夏のある朝、白人の女の子が遅れて来て、私がせわしくしている食器室に、飛び込んで来た。彼女は更衣室に入って、着替えをしていたが、ドアが開く音がするやいなや、彼女の呼ぶ声を聞いて、私は驚いてしまった。

『リチャード、早く来て！ エプロンの紐を結んでよ！』

彼女は私に背を向け、エプロンの紐を垂らしたまま、突っ立っているのであつた。私は一瞬、戸惑つたが、二本の垂れ下がった紐を取り上げ、彼

女の胸を一回りさせて、後ろのところで、ぎこちなく結んだのであった。

『本当に、ありがとうね』彼女は、私の手をさっと握って言うと、行ってしまった。』<sup>10)</sup>

このような行為に直面して、内心驚き、戸惑う彼は、自己に及んでいる南部社会の人種関係の規制、なかでも黒人男性と白人女性との異性間の行動規制が、いかに強く働いているかを、改めて感じるのであった。

「私が、南部に生れ育ったのでなければ、彼女のささいな行為は、本人と同様に、私も気に留めなかったであろう。』<sup>11)</sup>

また、北部の女性が、黒人である彼を嫌悪しないことを、身をもって知ったのであった。

「今しがた、無頓着に、私に寄り掛かっていた白人の女の子が、私のことを意識していないし、私を、あらゆる代価を払っても、これを避けるべき生き物だと、感じさせるような、根深く、漠然とした、道理に合わない恐怖感など、全く持っていないのを知ると、気持ちは無事に治まるのだった。』<sup>12)</sup>

南部に生れ育ったのは事実だが、今はもうそこにはいない。彼は北部の大都市にいる。南部はもう遥か彼方の異国である。彼は北部人として、行動できるのであった。しかも、白人女性が、彼が懸念したような、黒人嫌悪の情を持ってはいないのである。彼は北部の、開放的な人種関係の側面に視点を据え、現実の世界、即ち日常生活において、個人としての、自由と幸福を積極的に追求することになる。

彼がレストランで、共に働いた白人の女の子達は、さして深く物ごとを考



える訳ではなく、いずれも平凡な女性達であった。

「私はこの女の子達のことで、感心するものは、何一つなかったし、何の憎しみも感じなかった。私の気持ちは、一種の、変わる事のない友情に満ちた、戸惑いであった。」<sup>13)</sup>

人種偏見とその差別を被ることなく暮らしている、彼女達の話に耳を傾けていると、白人の若者達が人間生活の表面を、浅く生きているに過ぎない、と彼には感じられた。

彼が知的な白人女性達に出会うのは、数年後のことである。

彼が作家を志しているのを知った、職場の白人の若者に勧められて、1932年の秋、彼はシカゴのジョン・リード倶楽部を訪ねる。

彼を見掛けた白人男性が声を掛け、その訪問を歓迎する。

その日はこれといったスケジュールはないが、機関誌『レフト・フロント』の編集会議があるから、それに参加してはどうかと、気さくに誘われる。そして、画家や作家を志す若者達に紹介される。

見知らぬところを訪ね、しかも白人から、このように好意ある対応を受けたのは、彼にとっては、恐らく初めての体験であろう。

ここは芸術をとおして、社会変革に参加する芸術家と、これを志す人々の集まりであり、人種偏見は見られない。彼は部屋の片隅に腰をおろし、編集会議に加わる。そして、彼も何かこの雑誌に出すように求められる。

彼はその日直ぐに、白人女性達と知り合ったことを述べている。

「集まりの後、広告会社に勤めるアイルランド系の女性、ソーシャル・ワーカーの女性、教員、著名な大学教授の妻などに会った。私はこの種の人達のところで、家事手伝い人として働いたことがあったので、疑念を抱いていた。彼女達の意図を探ろうとして見たのだが、恩着せがましきなど

なかった。]<sup>14)</sup>

彼を歓迎する白人の世界に入っても、彼の警戒心は働く。彼が黒人であるがゆえに、意図的に、丁重に扱っているのではないか、冷静に対応しなければならぬと考える。

共産党が後援する、この倶楽部に内部対立が見られ、彼が黒人であることを利用したと思われる動きがあっても、彼はこの倶楽部にあつて、人種偏見と差別を受けることはなかった。彼はここで、指導的な役割を果たす機会を得ることになり、すぐれた人材と接し、これまでの人生において初めて充実した時期を迎えることになる。

「今後数十年にわたって知り合うことになり、私の人生で初めて長続きの間柄になる、男女達に出会うことになった。]<sup>15)</sup>

倶楽部の書記を勤めるには、共産党に参加する必要があると言われ、ジョン・リード倶楽部に、大きな意義を見出していた彼は、入党する。そして臨時の職で生計を維持しながら、積極的に創作活動を始めることになる。

彼は黒人党員の活動、その心情について知り、これを材料にして、伝記ものの作品を仕上げる予定があつた。党紀に反して告発されている一党員を格好の材料と判断し、面談を求めると、彼を自宅に招いてくれる。訪問してみると、彼の妻はユダヤ系の白人であつた。

党の要件で呼ばれて出向いて行った有力な黒人の党幹部は、ヨーロッパの白人女性と結婚していた。

彼はこれらの事実を述べるだけで、これに関して何も言及していないが、白人と黒人との人種間結婚が現実になされており、しかも、何の社会的圧迫も存在しない世界が実在するのを、目の当たりにしたのである。

彼は政党組織の一員として、党の決定に従って行動することに強い束縛を感じ、1944年に離党するが、この党のもとに集まった人々に、深い友愛の情を持つことになる。その気持ちを、彼はあからさまに表現している。

「私が愛する人々の真っ直中に、私は立っていた……。」<sup>16)</sup>

「……私は一人でささやいた。実際、私はこの人達を愛しているのだ……」<sup>17)</sup>

「私はこの人々の側にあつた。一黒人として、そうせざるを得なかつた。彼等は黒人を憎悪しなかつた。彼等には人種偏見がなかつた。この会場の白人男性の多くが黒人女性と結婚していたし、さらにまた、黒人男性の多くが白人女性と結婚していた。……

人種憎悪が、私の人生を破滅させる原因であつたが、それを除去し得ることが、この私の目の前で、具体的に証明されているのであつた。」<sup>18)</sup>

彼は、黒人に対する偏見のない白人達が存在することを、身をもって知つたのである。

彼は黒人女性だけでなく、白人女性とも積極的に接触するようになる。マーガレット・ウォッカーが目撃したような場面が生じ、またライトの研究者マイケル・ファブレが指摘する如く、

「シカゴでは……文字を知らない、若い黒人女性との関係の他に、短期間であるが、大体は進歩派やジョン・リード倶楽部の、共産党シンパの白人女性達と関係を持っていた。」<sup>19)</sup>

また、ライトは高等教育を受けた、美しい、知的な黒人女性達と知りあつ

ており、マーガレット・ウオッカーもその一人であった。

1937年5月シカゴを去って、ニューヨークに移り住む。別れに際して、彼は思わずマーガレットの手を握りしめ、さよならを言った<sup>20)</sup>。

ニューヨークでは、気に入った女性がレズビアンであったり、結婚したいと思った女性の父に、収入の安定しない新人作家であるゆえに、反対されたり、血液検査で相手に病原菌が見つかって、婚約を解消したりで、ライトが求めた、教養のある黒人中間階級出の女性達との結婚話は、うまくいかなかった<sup>21)</sup>。

これは1938年5月までのことである。6月になって、ライトは小説の題材に、ニクソン事件に関する新聞記事の収集をウオッカーに求めている。既に『アンクル・トムの子供達』は出版されており、彼は著名な黒人作家となり、『息子』の創作に取り掛かっていた。11月、彼女はライトの訪問を受け、シカゴを舞台にした、この作品の素材の検討などを共に行なっている。

1939年6月、ウオッカーはライトをニューヨークに訪ねる。そして、これが二人の交友関係の最後となる。彼が執筆中の作品に、彼女は意見を述べ、コメントを加えて来たが、それが、交友関係を損なった、一つの原因だと考えられている。ウオッカーは当時を振り返って述べる。

「1939年の6月に、ニューヨークへ行かなかつたら、私達は親しい間柄でいられたであろうかと、時には自問する。そうではあるまいと思う。二人の関係が、どれほど価値あるものであれ、この3カ年で、すべての事が終わるべく、定められていたようである。当初、私は深く傷ついた。その後、何年も苦しんだ。」<sup>22)</sup>

ライトは、1939年の初めに、二人の白人女性に出会った。エレン・ポプラとディマ・ロウズ・ミードマンである。共産党支部の、責任ある地位にあったエレンがロマンスよりも政党活動に心を傾けている時、ライトは彼女に夢中

であった。その一方で、バレエ・ダンサーで、党の援助も多少受けている、ダンス教室を運営しているディマに、魅力を感じていた<sup>23)</sup>。

彼はディマとの結婚を考え、5月に友人のセオドル・ワードに、この結婚について助言を求めた。友人のラルフ・エリソンにも、同様の相談をしている。白人と結婚することに、良心の呵責を感じている、とライトはワードに語ったというが、彼が既に、多くの白人女性と関係を持っていたので、エリソンは、そんな言葉を信用しなかった<sup>24)</sup>。

エリソンはむしろ、ライトとエレンの関係を知っていたので、ライトの気紛れを考慮に入れて、慎重な態度を示した<sup>25)</sup>。

ライトがウオッカーと決別するのは、翌6月である。もしもライトが、別の女性を愛していることを、彼女に伝えたとすれば、あのような衝撃と絶望の苦悩に、ウオッカーは見舞われることはなかったであろうと、マイケル・ファブレは指摘している<sup>26)</sup>。

ライトは白人女性との結婚を腹に決めながら、ウオッカーと別れた後も、若く、美しい黒人女性や人妻との親交があった<sup>27)</sup>。

彼はディマと結婚する旨エレンに伝え、彼女を落胆させる。そして8月にディマと結婚する。結婚後、このことを、親しくしていた黒人女性、ジーン・ブラックウエルに伝えている。ライトの心配は、彼が白人女性と結婚すると、彼の友人達が彼に口を利かなくなるのではないか、ということであった<sup>28)</sup>。

彼の行動を見ていると、結婚相手に白人を選ぶか、黒人を選ぶかの迷いがあつたように見えるが、異性関係が両人種にまたがるものの、白人女性に対する関心の深さと、人種偏見のない白人の存在を目の当たりにして以来、白人女性の方を志向し、これを求めていたようである。

彼は1931年頃、シカゴの病院で用務員の仕事をしていたが、その時目にした白人女性と黒人女性の相違を印象深く描いている。

「白く輝く、糊の利いた制服を身に着けて、白人女性の一行が通過して行った。顔付きは機敏で、歩みは速く、体は細身で形よく、背筋を伸ばし、顔は明るく、意欲に満ちていた。彼女達の後に、石鹼粉の缶、雑巾、棒雑巾、箒をさげた、老けて、太って、よれよれの棒縞の服を着た、だらだらと歩く黒人女性の一行がやって来た。」<sup>29)</sup>

彼はこの二つの列を比べて、人種差別がもたらす、女性の在り方の相違を強く批判しているのだが、整然と歩み行く白人女性達に、彼は白人文化の優れた面が体现されているのを見ている。

ディマと結婚した翌年、『息子』が出版される。そして、その翌年、1941年ディマと離婚、エレン・ポプラと結婚し、彼女は生涯の妻となる。

1945年、『ボーイ』が出版される。そこには、1937年『倫理』に描かれた挿話が修正されて挿入されている。

白人男性に、その尻を平手で叩かれた黒人少女は、ふしだらな女に替えられている。

「……ある夜、帰りがけに、私の帰る方向に住んでいる女の子を見掛け、途中まで一緒に帰ることになった。私達が、白人警備員の側を通り過ぎた時、彼はふざけて、女の子の尻を平手でピシャリと叩いた。私は驚いて振り返った。この女の子は、身をよじって彼の手を逃れ、頭をもたげて、つんとして廊下を歩いて行った。私はその場を動かなかった。

『おい、黒いの。俺のやったことが気に食わんようだな。』

私は動くことも、口を利くこともできなかった。彼がピストルを抜いたところを見ると、私が動かないでいるのを彼に対する挑戦と受け取ったようだ。

『気に入らんのだな、黒いの?』

『そんなことはございませぬ。』私はかすれた小声で言った。

『それなら、そのように言え、この糞つたれ!』

『はい、それでよろしゅうございますとも!』私はできる限り心を込めて言った。

ピストルが向けられているのを知りながら、怖くて振り向かず、廊下を歩いて行った。外に出ると、喉がつまって、燃え上がるように感じた。この女の子は、私を待っていた。私は彼女の側を通り過ぎて行った。彼女が追いついて来た。

『どうしてまた、あいつに、あんなことをさせるんだ?』私は憤然として言った。

『何でもないことよ。あの人達は、しょっちゅうあんなことするのよ。』

『おれは何とかしたかったのだよ。』と私は言った。

『そんなことしたら、あんたが馬鹿な目にあうだけよ。』

『一体どんな気であるんだい?』

『こつちが頼まなきゃあ、向こうもそれ以上のことはしないわよ。』と彼女はあっさり言うのだった。

『本当だね、馬鹿をみるところだったよ。』と言ったが、彼女には私の言っている意味が分からなかった。』<sup>30)</sup>

この女の子は、ふしだらであるばかりか、知的でない黒人少女に替えられている。

ビッガー・トーマスのメアリー・ドルトンに対する行為と意思、愛憎の情、つまり、愛好と嫌悪の情感と、彼がマックス弁護士に供述する内容の矛盾、混乱は、両人種の異性に対するリチャード・ライトの心の葛藤を反映しているようである。

〔注〕

- 1) 次の描写には、メアリーの拒絶反応に、彼が身体的、官能的反応の次元で呼応する面が見られる。

「メアリーの体がうねるようにもりあがってきたが、彼女が動いたり、声を上げると困るので、そうさせまいと腹に決めて、全身の重みを枕にかけて押し戻した。……またメアリーの体がもりあがってくるので、全身の力を込めて枕を握り、押さえた。彼女の爪が手首にくいこんでくる強い痛みを彼は長い間感じていた。」 Richard Wright, *Native Son* (A Perennial Classic, 1966), pp.84-85.

「やがて、急に彼女の爪が手首に食い入らなくなった。メアリーの指の力が抜けた。彼女の体が彼に逆らってもりあがらなくなったのを感じた。彼女の体は動かなくなった。」 *Ibid.*, p.85.

2) *Ibid.*, p.85.

3) *Ibid.*, p.86.

4) 『岐阜経済大学論集』第27巻第1号(1993年6月), p.51.

5) Richard Wright, *Uncle Tom's Children* (Harper & Row, 1960), p.10. The Ethics of Living Jim Crow は1937年に刊行された *American Stuff* に収録された。1940年版の *Uncle Tom's Children* に再収録されて以来、この短編集に含まれている。

6) Maichel Fabre, *The Unfinished Quest of Richard Wright* (William Morrow & Company, 1973), p.195.

ファブレはウオッカーの無分別とも言える忌憚のない批評、助言がライトを失う原因であったと述べると共に、ライトが他の女性に恋心を抱き結婚しようとしていたことを彼女が知っていたら、失望と衝撃の苦惱もさほど酷くはなかったであろう、と書き加えている。

7) Margaret Walker Alexander, "Richard Wright", David Ray and Robert M. Farnsworth ed., *Richard Wright* (University of Michigan Press, 1973), p.56.

8) Richard Wright, *American Hunger* (Perennial Library, 1977), p.11.

9) *Ibid.*, p.11.

10) *Ibid.*, pp.11-12.

11) *Ibid.*, p.11.

12) *Ibid.*, p.11.

13) *Ibid.*, p.12.

14) *Ibid.*, p.62.

15) *Ibid.*, p.62.

16) *Ibid.*, p.118.

17) *Ibid.*, p.119.

18) *Ibid.*, p.119.

19) Fabre, *op.cit.*, p.195.

20) Alexander, *op.cit.*, p.57.



- 21) Constance Webb, *Richard Wright* (G. P. Putnam's Sons, 1968), pp.180-181.
- 22) Alexander, *op. cit.*, p.63.
- 23) Fabre, *op. cit.*, p.198.
- 24) Webb, *op. cit.*, pp.181, 407.
- 25) Fabre, *op. cit.*, p.561.
- 26) *Ibid.*, p.195.
- 27) *Ibid.*, p.197.
- 28) Webb, *op. cit.*, p.407.
- 29) Wright, *op. cit.*, p.46.
- 30) Richard Wright, *Black Boy* (A Signet Book, 1964), pp.217-218.

## b. 捜査関係者との対決

ビッグーはメアリーの死を知った時、一瞬、道義的責任を感じる。彼は間違いなく、一人間として、一人の白人女性に接したからである。しかし、それは持続しない。彼女との間に生じた人間関係は浅く短く、また彼の側からの一方的なものであったから。

彼は偏見と差別を被ってきた人種集団の一員、一黒人であるという人種的現実に立ち戻ると、死の刑罰が迫るのを実感する。

黒人男性による白人女性の過失致死は事実であっても受け入れられず、人種偏見と差別によって、それはいかなる釈明も通用せず、殺害とされ、極刑を受けるに決まっている、と彼は判断するから、自首する考えは浮かばない。捕らえられると処刑されるから、これを免れる方法を直観的に考え、即座に実行する。

先ず証拠を隠して、事件の発覚を可能な限り阻止して、逃亡する以外に無い。死体をトランクに詰め、部屋の外に持ち出し、家人の目につきにくい地下室まで運ぶ。そこで暖房炉の炎が目につくと、これを焼却する考えが浮かび、即座に実行する。炉の口に合わせて、死体をバラバラに分け、投げ込んで行く。

生活面での意欲と思考、行動に欠けるビッグーだが、犯罪隠蔽工作の面で

のそれは、精力的で、大胆で、また俊敏である。

ライトには、人種差別が制度化し、社会生活の面で、黒人人口のかなりの部分がビッグーのような境遇に置かれ、偏見と差別によって、黒人に対する公平な見方が成り立たない社会では、ビッグーのように思考し行動する黒人が続出しても、それは不思議ではない、という見解を示し、警察、検察、裁判、報道面における、偏見と差別を描いて、白人社会に揺さぶりをかける意図がある。

だから、死亡したメアリーの体が、ビッグーの手によって解体され、炬にくべられる、恐怖に満ちた過程も克明に描かれている。

また、ビッグーがメアリーの死亡に関して、人間としての道義的責任をさほど感じないところに見られる如く、黒人と白人との人間関係が不平等な人種関係によって空洞化している実態を示し、人種関係がアメリカ社会の大きな問題と化している事実を提示して、その解決を迫る。

ビッグーは人を死亡させ、さらにその証拠を湮滅すべく、これを解体、焼却したことによって、否応なしに社会に対立する存在となる。加害者、被害者の肌の色を問わず、また社会の判断や裁判の公正さの如何を問わず、一人間であるビッグーの、一人間であるメアリーに対する、この行為によって。

しかし、彼はこの面で、即ち人間関係の面では、メアリーの死を考えていない。彼は人種関係の面で考えている。

「彼は過失によって人を殺したのだが、それが過失によるものであったと自分に言い聞かせる必要を、一度も感じなかった。彼は黒人であり、白人の女性が殺された部屋に、一人でいたのだ。だから、この女性を殺したのだ。彼がどう言おうとも、誰もがそう言うのだ。……彼の犯罪は自然な出

来事に思われた。自分の全生涯が、何かこのようなところへと、導かれていたのだと彼は感じた。自分や自分の黒い肌に、どんな事が起こるのかは、もはや疑ったり、怪しんだりする事柄ではないのだと、今になって分かったのであった。』<sup>1)</sup>

彼は黒人である自分の人生の方向が、白人社会の偏見と差別によって定まっていたと解釈する。しかし、その運命を受け入れて、自首し、白人社会の恣意的な判断によって処刑されるという考えはない。むしろ、事実を隠蔽して処刑を避けることに、彼の存在の意義を見出す。

しかし、「過失によるものであった、と自分に言い聞かせる必要を、一度も感じなかった」が、それが間違いなく過失であったことは、彼自身知っている。ビッグーはメアリーを伴って、その寝室に到達した時、彼女に魅力を感じ、彼女の寝室から離れることができない程の愛着があった。彼女に対する敵意も憎悪もない、いわんや殺意など微塵もなかった。彼は僅かの時間であったが、一人間として、メアリーに接していたのである。彼はマックスの問いに対して、その事実を否定する如く、彼はそれを認めたくないのである。その理由は本稿(I)において指摘したが、

「ビッグーは白人社会に『はねつけられて』、憤慨し、『白人社会に対する非常に強い憎悪』を抱いているが、白人社会に対して『強く心を引きつけられた』状態はそのまま持続している、……」<sup>2)</sup>

という人種愛憎の面で、自己矛盾に陥っており、人種的に圧迫された者として、これを露呈することは屈辱と感じているためである。

彼は自己を白人女性を密かに殺した黒人と規定し、白人社会に存在する人種偏見を利用して、この社会を翻弄し、さらに利益を得ようという考えを

持つ。

「……黒い肌をした臆病な黒人の少年が、金持ちの白人女性を殺害して、焼き捨てておいて、こんな風に席に着いて、朝食を待っているなんて、誰が想像するだろう？ 彼は昂揚した気持ちになった。」<sup>3)</sup>

ジャンに貰った合衆国共産党のパンフレットを目にすると、メアリーの失跡をジャンと、この政党に結び付け、誘拐事件に仕立て、身の代金を要求する考えが浮かぶ。

「今逃げ出せば、メアリーがいないことも分かる。そうすると直ぐ、彼が何かこのことについて、知っている筈だと思われるだろう。逃げ出してはいけない。そこにとどまっていて、どんなことになるか見ている方がはるかに有利だ。メアリーは殺されたのではないか、と考えるには、時間がかかるだろうし、彼がやったのだと考えるにはもっと時間がかかるだろう。それよりも、メアリーがいないと知った時、アカのことを先ず考えるのではないか？」<sup>4)</sup>

メアリーの死亡事故を隠蔽し、白人社会を出し抜くために、彼はアメリカ社会で根強い、共産主義に対する偏見と反感を利用することになるが、この計略に信憑性を持たせる上で、彼は人種偏見と黒人に関するステレオ・タイプを巧妙に利用する。

作品では、彼はメアリーの死を人種関係でとらえ、行動するように描かれるが、その根底にはメアリーと、次にジャンと彼との間に生じた人間関係が隠されていることを見逃してはならない。

白人達と対決する場所は、ドルトン家の地下室と台所、そして彼にあてが

われた使用人部屋である。

彼はペギー、ドルトン夫妻、探偵ブリトン、ジャン、その他新聞記者達など、人種関係の立場に身を置いて、その計略を実現するために対応し、または対決するが、人種偏見と思想的偏見の強い人物ほど、ビッグーの計略にはまり易いことが分かる。その意味で、ビッグーの行為は事実を隠蔽するという不当な行為であるが、偏見が真実を見る目を曇らせるものであり、誤った判断に人を導くことが、特に探偵ブリトンの例で明らかにされる。またジャンに対するビッグーの態度を見ると、ビッグーが白人と白人社会に何を求めていたのかが明らかになる。

ビッグーの行動を見ることにしよう。

彼はドルトン宅に出掛け、地下室でペギーに出会い、炉に石炭をくべ、駅に向かうメアリーを送るべく、車の運転席に着く。雇われて二日目の朝である。

メアリーが自室から降りてこないで、彼はペギーを介して呼んでもらう。メアリーは自室にいない。ドルトン夫人の部屋にもいない。

彼は自分の方からは口を利かず、ペギーの問いに「はあ」とか「いいえ」とだけ答え、肝心なところでは、前夜の事実の一部分だけを、時間と場所から切り離してほめかす。

前夜、車は車庫の外に放置したままであり、メアリーの死体を運んだトランクは、彼女の衣類の一部が入ったまま、地下室の片隅に置かれている。これらは、いずれもメアリーの命令によってなされたことになる。

白人令嬢の命令に、黒人運転手ビッグーが従うのは当然視される。疑問に思われるところは、ドルトン家の娘の行状を知っているペギーの文脈で解釈される。

メアリーはジャンと連絡を取って既に出掛けたものと推測され、ビッグーはトランクだけをシカゴ駅に運ぶ。

ドルトン宅にジャンから電話がかかる。これによって、メアリーの早朝の無断外出にはジャンが関係していると推測され、計略はスムーズに働く。

自室に戻って階下の物音に気付くと、即座に押し入れを開け、自分の衣類を出して、そこに入って聞き耳を立てる。突然人が来た時には衣類の整理中だと言い抜けることまで考えに入れている。

ビッグーが去った台所では、ドルトン夫人とペギーがメアリーの私生活の面を語るのが聞こえる。ビッグーは聞き耳を立て、情報を得る。黒人ジェフが、ハックルベリー・フィンと白人の男達とが交わす話を、水中に身を隠して、すつかり聞き取るように<sup>5)</sup>。

奴隷商人が近辺に姿を見せるようになったので、ジェフが警戒心を高めている頃、ワトソン嬢が彼を売る話をしているのをドア越しに盗み聞きして、彼は難を逃れるべく逃亡したのだった<sup>6)</sup>。

ビッグーは、黒人が奴隷制の時期とその後の人種差別の諸制度のもとを生き延びるなかで発展させた、黒人特有の文化を身に付けている。

アメリカ黒人の文化を構成する諸要素には、アメリカ白人の文化とは、その相違を際立ったものにする価値基準が幾つか存在する。そのうちの一つ、「適応能力」を取り上げておこう。歪曲された面があるが、ビッグーが白人達を出し抜く上で発揮する能力はこれに含まれる。

### 「適応能力

黒人に対して、基本的に敵対する社会においては、生き延びる能力は黒人にとって重要なものであり、必要な場合、家族構成員の持つ役割を替えることも行なわれて来た。白人に対処し、駆け引きする時、多くの黒人が仮面を付けて、本心を隠す行為をとるのも適応能力に含まれる。これには攻撃・加害を回避するために、言い逃れたり、計略にかけたり、鬭争姿勢

を取ったりする技能、あるいは、人種関係において、変転する状況に対処し、これを切り抜ける上で、必要なものすべてが含まれる。』<sup>7)</sup>

チャールズ W. チェスナットの『グランディソンの越境』では「仮面を付けた」奴隷の行動がユーモラスに描かれている。

主人に忠実な奴隷グランディソンが、若主人の従者として北部旅行に随行する。若主人は、人道的で開明的であるところを恋人に見せて、その歓心を買うべく、この奴隷を逃がそうと試みるが、根っから従順で、忠実なグランディソンは逃亡の機会があっても逃げようとはしない。

業を煮やした彼は、この従者をカナダまで連れて行って、置き去りにして帰る。ところが、グランディソンは遠い南部まで、一人で戻って来る。大農園の主人は感激して、この奴隷に特別な待遇を与える。

「ある朝のことである。グランディソンがいなくなっていた。グランディソンだけではなく、彼の妻である、召し使いのベティ、彼の母親、叔母のユニス、彼の父親、叔父のアイク、彼の兄弟のトムとジョン、彼の妹のエルジーまで大農園から姿を消していた。」<sup>8)</sup>

グランディソンは北部旅行中、巧妙に地下鉄道運動関係者達と接触し、また北部と南部の間を往復して、その土地勘を得た後、一族を連れて逃亡したのであった。彼は自由を求めて、奴隷州南部を脱出する機会を密かに求めつつ、主人に忠実な奴隷の振りをして暮らしていたのであった。つまり彼は「仮面」を被り、「演技」をしながら、奴隷生活を送っていたのであった。

奴隷制度のもとを逃れて、自由を獲得することを目標に、ジェフもグランディソンもこの「適応能力」を発揮する。

ラルフ・エリソンの『見えない人間』の「私」は、奴隷であった祖父が父

に残した遺言が脳裏を離れない。

『『いいかね、私が他界した後も、しっかりと戦い続けて貰いたい。これまで何も言わなかったが、私達の生活は、一種の戦争なのだよ。私は生涯、裏切り者だった。南部再建期に銃を捨てて以来、敵国に住むスパイだった。ライオンの口に頭を突っ込んで生きるのだ。はい、はいと迎合して、彼等白人どもをやっつけて貰いたい。ニコニコ顔で彼等の土台を崩して欲しい。彼等に同意してやって、彼等を死と破滅に導いてくれ。彼等に、お前を呑み込ませてやって、嘔吐させるか、腹を破裂させてやるんだ。』』<sup>9)</sup>

南部再建期が終わり、連邦政府軍が南部から撤退すると、黒人は再びその権利を奪われ、人種隔離制のもとに抑圧されることになる。この遺言は、黒人を差別し抑圧する白人達とその社会に、仮面を付け、演技を行ない、巧妙に対処して、差別的な諸制度を廃絶させるべく、自由と平等を求める戦いを続けるよう、子孫に願ったものである。

上述の「適応能力」の根底には、人種差別社会において、差別のない社会の実現を求める精神、即ち、自由、平等、正義、そして平和を求める精神が存在する。これを基本的理念として、黒人を差別扱いする白人と、その社会に対して、身の安全を計り、臨機応変に対応し、また対決しながら、生きて行く能力が、黒人文化においては、高く評価されるのである。

この観点からすると、ビッグターの発揮する「適応能力」には、この能力の根底にある基本的な理念から逸脱する面が出て来る。

彼の計略、事実の回避、言い逃れ、虚偽の陳述などには、これを手段として、不当な処遇や生命の危険を避けて獲得すべき、あるいは実現すべき正当な目標が存在しない。

白人社会が黒人に対して敵対的であれば、先ずこの白人社会に近寄らない



ことである。敵対的な社会に必要ながあつて近付く場合には、これに即した接触の仕方と能力が要求される。

黒人文化においては、これを上述のように「適応能力」と規定し、これを尊重する。

ビッグーは先ず最初に、この能力を発揮することに失敗したのである。メアリーをその寝室に抱え込んで、寝台に横たえた時、そのままこっそりと、家人に気付かれないように、その場を立ち去るべきであつた。彼はそれを感じていた。

「彼は彼女を抱き上げて寝台に寝かせた。直ぐにこの場を去らなくては、とせき立てるものがあつたが、……かがみこんで……彼女の顔を見下ろしていた。」<sup>10)</sup>

寝室から素早く出て、予感される災難を逃れるべきであつた。彼が失敗したのは、彼が白人女性メアリーに一方的に、強く引きつけられ、これに抗することができなかつたからである。彼は黒人文化が与える身の保全を、最も肝心な時に自ら放棄したのであつた。

彼は自らの失敗によって、白人女性を死亡させ、自分の生命が危機に直面して初めて、黒人文化が与えた逆境を生きる「適応能力」を発揮しようと奮闘するのだが、その「能力」の根底にある理念を失っている。だからビッグーの行為には空しさと醜さが感じられる。

ビッグーの計略は冷酷に動き出す。

ビッグーはドルトン氏の命令でトランクを取りに駅に出掛けるが、夫妻の疑念がジャンに向けられて来たので、脅迫状を送る時期だと判断する。

ドルトン氏の方では、彼の会社専属の探偵ブリトンを呼び、ビッグーに質問させる。

この人物は四人の白人の中で、黒人との接触体験が一番多いようであり、また、黒人に対する偏見も強い。彼は最初からビッグーに疑いの目を向けている。彼は次のようにペギーに質問している。

『あのねえ、ペギー。あいつの振る舞いはどうだね？』

『それはどういう意味でしょうか、ブリトンさん？』

『あいつ賢そうに見えるかい？ 演技でもしているように見えるかい？』

『分かりませんわ、ブリトンさん。他の黒人の男の子等と同じようですけど。』

.....

『しかし、実際よりは無知なように見せかけているようなところはないかね？』

『分かりませんわ、ブリトンさん。』

.....

『あいつ、時には普段よりも賢そうに喋ったりはしないか？』

『いいえ、ブリトンさん。あの子はいつも同じ調子で喋りますが。』

.....

『あいつに話しかけると、返事をする前に、どう答えようかとためらうようなことはないかね？』<sup>11)</sup>

ブリトンは、黒人が白人に接する時、「実際よりは無知」に見せかけて白人を出し抜いたり、「演技」をして機嫌を取り、旨く目的を達したり、不利な事態を避けようと、言い逃れすることがあるのを知っている。

ビッグーもこの人物を警戒している。

彼はブリトンの探知力をしのぐ「演技」を行ない、「仮面を付けて」慎重に、巧妙に対応し、彼を出し抜くばかりか、信用させてしまう。

ブリトンはビッグーを腰掛けさせて質問する。

「『ゆうベドルトン嬢をここからお送りしたのは何時だった？』

『八時半頃でございました。』

いよいよ始まったな、とビッガーは思った。この人物はあらゆることを探り出すためにここに来ているのだ。これは取り調べなのだ。彼に向けられた疑いを決定的にそらせるように、応答しなければなるまい。作り話を聞かせてやろう。話の中の事実に関するものは、その意味が分かっていないような振りをして、ぼつりぼつりともらしてやろう。尋ねられたことだけ答えてやろう。

『学校へ送って行ったんだな？』

彼はうなだれて、答えなかった。

『おい、答えるんだ！』

『はい、ところで、それが、私はここで働き始めたばかりのことですて……』

『お前何を言ってるんだ？』

ドルトン氏が近寄って来て、彼の顔を険しい目で見つめた。

『この人が聞いていることに答えなさい、ビッガー。』

『はい、承知しました。』

『あの方を学校へお送りしたのか？』と彼は繰り返し尋ねた。

それでも彼は返事をしなかった。

『ものを尋ねているんだぞ、おい！』

『学校へはお送りしませんでした。』<sup>12)</sup>

彼は学校へは行かなかったという事実には答えず、返事を恐れるかのように言い渋るばかりか、首をうなだれて、隠し事をしているかのように演技する。

ブリトンはこれが演技であることを見抜けない。ドルトン氏はもちろん。

『あの子は学校へは行かなかったのかい?』ドルトン氏は事の意外さに口をだらりと開けて言った。

『ビッグー、どうしてそれをこれまでに私に話してくれなかったのだね?』

『言わないでくれと申されていたものですから。』

沈黙がただよった。……」<sup>13)</sup>

ビッグーは白人の信頼を獲得する上で、決定的な意志表明をしている。メアリーは大学へは行かなかったことを口外しないようにビッグーに頼んでいる。彼はこれを守る覚悟だったことを示した、つまり白人雇い主の令嬢、若い女主人の命令、あるいは依頼されたことを誠実に守る、忠実な黒人従者であることを示したのである。

彼はドルトン家の運転手として採用された。奴隷制の時期であれば、大農園主の邸宅に勤める、忠実な御者であり従者である。この主人と女主人、その家族に忠実な黒人従者や召使いは、物語や映画などで美化されている。

ビッグーはブリトンの問いには答えなかったが、その主人に促されるとやむを得ず答える。その父であり、ビッグーの雇い主である主人には、若い女主人が行方不明である以上、解決の手掛かりを提供するために、口止めされたことも、敢えて告げることによって、ドルトン家への忠誠ぶりを示すのである。

彼がうなだれたのは、主人と若い女主人との間にあって困惑する、哀れな、しかし忠誠心のある黒人を演じるためである。そして、それは効果をあげる。

行った先を問われると地域を言い、問われて通りの名を言い、こまかく番地まで問われると、おおよその番地と言いながらも正確に伝える。そうすると、ドルトン氏の方が、そこなら「労働者救援本部」だと答えを出す。そし

てブリトンに、彼等が話題にしているジャンという人物が「アカ」だと告げる。

不動産会社の探偵をしているブリトンには、この事実は反感を持たせる効果がある。人種や民衆の側に立つ政党に偏見を持つ者は、これに対する憎悪や反感によって、その偏見を深める。

メアリーの死亡を隠蔽するためにビッガーが発揮する「適応能力」の空しさが、この場ではその性質を変える。それはビッガーが対決する対象がブリトンの偏見と差別思考であり、ブリトンの追及は彼が強い偏見の持ち主であることによって、ビッガーの巧妙な演技と計略の罠に落ち、迷路に入る。その点で、ビッガーの相手を出し抜く行為は意味を持つ。ライトはこの場面を愉快そうに生き生きと描く。

白人の男性が白人の女性と黒人の男性を同乗させて車を運転する。黒人街のレストランへ白人女性を連れて行き、三人が同じテーブルで食事する。そこで共産党が黒人側に、ある話を聞かせる。

ブリトンが嫌がると思われる事実はジャンの命令によって行なわれたことにして話すビッガー。憤懣やる方ないブリトン。

ビッガーはここで、酒を飲んだのはジャンとメアリーだけにして、彼が酔っ払った二人をドルトン宅へ乗せて帰ったことにする。そして、一挙に事実を歪曲する。

『ドルトン嬢はどれぐらい酔っておられた？』

『その、もうほとんど立ってられない程で、はい。一緒に家に着きました時には、あの方が抱え上げないと階段をあがることができなかったのです。』とビッガーは目を伏せて言った。

……………

ブリトンはドルトンの方を向いた。

『お嬢さんは一人ではこの家を出て行けなかった筈ですよ。奥様の言わ

れた通りなら、一人でお出掛けになった筈はないです。』<sup>14)</sup>

ブリトンの頭ではメアリーの失跡とジャンとがしっかり結び付く。

ビッグーの話だけでは腑に落ちないドルトン氏に呼ばれて、ジャンが訪ねて来る。

ジャンとブリトン、ビッグーとのやり取りを聞いていたドルトン氏はビッグーに疑いの目を向ける。しかし、ブリトンには何の疑念も生じない。

『『ビッグー、君はこの件で本当のことを言っているんだろうね?』とドルトン氏が尋ねた。

『はい』

『こいつは大丈夫ですよ。』とブリトンは言った。……』<sup>15)</sup>

ビッグーは、人種偏見が強く、また左翼政党への偏見と敵意の強いブリトンを罠にかけ、信用させたのである。黒人の性格についてよく知っている筈のブリトンは、その頑迷な差別性によって、ビッグーの罠にかかったままで終わる。ビッグーは仮面を付けて、上手に演技したが、これを行なうのに最も苦しむ相手がジャン・アーロンである。

『『ビッグー』とブリトンは尋ねた。『昨夜ドルトン家のお嬢さんをここへ連れて戻ったのはこの男だな?』

ジャンの口が開いた。彼はブリトンをじっと見つめ、ついでビッグーを見つめた。

『その通りです。』ビッグーは、感情を押さえようと苦勞しながら、小さな声で答えたが、彼には、ジャンを傷つけるようなことをしているのが分かっているのだから、ジャンがどうしようもない程憎らしかった。ジャンの大きく見開いた、信じられないような目で見つめられていると、体の奥底か

ら熱い良心の呵責を感じて、何かで彼を殴り付けてやりたい思いだった。

『君は僕をここまで乗せては来なかったじゃないか、ビッガー！』とジャンは言った。『何故そんなことをこの人達に言うのだ？』

ビッガーは返事をしなかった。彼はブリトンとドルトン氏だけに答えることにした。……」<sup>16)</sup>

彼は「仮面」を付け、巧みに「演技」を行なって、白人達を騙し、出し抜き、その計略にかけながら、「良心の呵責」など微塵も感じないが、ジャンにはそれを感じて、内心苦しむ。これは彼が、ジャンには人種関係よりも人間関係の面で反応していることを意味する。

彼はその計略を遂行するために、彼の問い掛けに沈黙し、ジャンを人種関係の次元に押し戻す。しかし、ビッガーがジャンという白人には「良心の呵責」を感じる点を見逃してはならない。

誘拐事件が新聞記事に載り、ビッガーの計略がセンセーショナルな報道に乗って、動き出す。

地下室には大事件に色めき立つ探偵や新聞記者達が集まって来る。彼等との対応を迫られるビッガーは悲壮である。

北部大都会の、非人間的な社会組織の中に投げ出された一黒人の若者が、自ら起こした深刻な事件を、他者から孤立して、彼なりに解決しようと、黒人文化が育てた逆境を生きる能力、「適応能力」を利用して、不毛の努力をする。

「ビッガーはこんな男達に、これまで出会ったことはなかった。彼に対して、どのように振る舞ったらいいのか、何を予測したらいいのか分からなかった。彼等はドルトン氏のように金持ちでもなければ、よそよそしくもなかったが、ブリトンよりも非個人的である点で、恐らくこの点において

危険なのかも知れないが、冷酷そうであった。』<sup>17)</sup>

この頃、暖房炉がくすぶり、地下室の記者達が煙にむせる。記者の一人が炉をかき回して、女性のイヤリングと人骨を発見し、ビッグーの計略が破綻する。

だが、ビッグーはペギー、ドルトン夫妻、特に探偵ブリトンを巧妙に出し抜いて、メアリーの死と遺体の焼却による彼女の不在を「失跡」さらに「誘拐」へと誘導し信じさせることに成功している。

ジャンは、メアリーとビッグーに途中で別れているから、彼に関してビッグーが虚偽の陳述をしていることは分かっているが、この虚言がビッグーの「演技」であるとは見抜くことができず、ドルトン家が何らかの意図をもって彼に強制したものと見る。

メアリーを死亡させた後、ビッグーが「仮面」を付け、「演技」し、その効果を上げはするが、「適応能力」の基本理念を失っている点で不気味である。

ライトは、黒人文化が育てた「適応能力」がその基本的な理念を失ってしまう程、兩人種間の社会的距離が広がり、人と人との接触が疎遠になっている状況を、ビッグーの行為によって示したのであろうが、同時に、この黒人文化が生んだ「適応能力」という価値基準に疑問を呈しているようである。

(つづく)

〔注〕

- 1) Richard Wright, *Native Son* (A Perennial Classic, 1966), p.101.
- 2) 『岐阜経済大学論集』第26巻第1号(1992年4月), p.59.
- 3) Wright, *op. cit.*, p.102.
- 4) *Ibid.*, pp.107-108.
- 5) Samuel Langhorne Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn* (A Norton Critical Edition, 1961), p.76.
- 6) *Ibid.*, p.39.



- 7) Robert Staples, *Introduction to Black Sociology* (McGraw-Hill Book Company, 1976), p. 76.
- 8) William L. Andrews, ed., *Collected Stories of Charles W. Chesnutt* (A Mentor Book, 1992), p. 203.
- 9) Ralph Ellison, *Invisible Man* (A Signet Book, 1952), pp. 19–20.
- 10) Wright, *op. cit.*, pp. 84.
- 11) *Ibid.*, p. 180.
- 12) *Ibid.*, p. 148.
- 13) *Ibid.*, pp. 148–149.
- 14) *Ibid.*, pp. 150–151.
- 15) *Ibid.*, pp. 160–161.
- 16) *Ibid.*, p. 157.
- 17) *Ibid.*, p. 187.